

# 近代家族における夫婦関係の不安定性

—— 社会的役割からの考察 ——

宮野直子

## 1

家族は長い間、社会の基礎的な構成単位として確固とした地位をしめて来たが、最近、近代家族の好ましくない特質として、その不安定性があげられている。この問題について社会学では、家族の大きさ、あるいは家族機能や家族関係の局面より種々の分析が加えられてきた。近代社会の成立・発展につれて、家族も近代化し、家族構成の規模もいちぢるしく縮少し、夫婦と未婚の子女よりなる核心家族 (nuclear family) が、近代社会における家族の一般的な形態となった。そしてこのような大家族から小家族への変遷によって、死亡、離婚などによる家族解体が容易におこる結果となった。次に、家族機能についてみれば、家父長家族においては、第一次的機能、すなわち性的統制、種の再生産、子の扶養、社会化はいうに及ばず、第二次的機能としての経済的生産、保護、教育、宗教、慰安、娯楽、社会的地位付与の諸機能も営まれ、これらの機能に家族成員がともに参与することによって、その成員間の結合は益々強化されていたのであるが、近代社会となり社会分化が進展するにつれて、これらの機能は他の社会集団に吸収せられ、家族機能は大体第一次的機能のみを残すこととなった。その結果、家族の連帯性は弱化し、結合度は脆弱化して不安定となったのである。第三に家族関係を社会関係とみて、それに作用する社会的統制の影響からその不安性が指摘されている。かってパーゼスとロックは、家族関係における社会的統制の変化に着眼して、有名な「制度家族から友愛家族へ」という概念を設定した<sup>1)</sup>。前者は家父長家族やあるいは封建家族をさし、後者は都市のアパートに居住する民主的な近代家族に最も典型的に見出されるものであ

って、友愛家族は近代家族の極限を表わす概念ともいえよう。制度家族における成員の行動は、法律、モーレス、慣習によって統制されたが、近代家族においては、これらの社会的統制から解放され、その成員の行動は成員の相互的愛情に基づくとするのである。この概念を引用し、近代家族は、制度家族のように法律やモーレスや慣習によって拘束されず、成員相互の情緒的な愛情に依存するためにきわめて不安定であると姫岡教授は述べられている<sup>2)</sup>。もちろん、情緒的な愛情はきわめて変動性があり、うつろいやすい性質をもっているであろうが、家族関係を社会関係としてみたとき、そこには多分に疑問の余地があるのではないかと考えられるのである。私は姫岡教授の説に対して以下のような二つの疑問をいただく。先ず第一に考えられることは、【パーセスとロックは、友愛家族を不安定なものとはみなしていない点である。友愛家族は、力動的に統一され資本主義のはげしい社会変動の中においてもよく適応できる比較的安定した家族形態であり<sup>3)</sup>、また、それは夫婦間の、共同の関心、およびその一致や民主的な関係のほかに、家族成員の人格の幸福な発展、すなわち人間最高の価値としての人格愛への発展に基礎をおく質的に高度に安定した愛情を目標としたものとして考えられている<sup>4)</sup>。愛の質的差異が家族関係の安定性や不安定性に及ぼす影響については既に本学紀要第四号にのべたので、ここでは省略することとする。第二に考えられる疑問は、制度家族においては、法律、モーレス、慣習によって成員が拘束されているのに反し、近代家族は全くこれらから解放され、その成員はただ自由な個性によってのみ行動し、その結果、個人的な情緒に支配される故不安定となったというのであるが、果して、これが正しいかどうかということである。私はこの第二の疑問を二つに分けて考察したい。先づ近代家族関係は果して、法律、モーレス、慣習のような社会的統制から解放されているかどうか、次にもし近代家族がこのような社会的統制から全く解放されていないとすれば、その不安定性は個人的な情緒にのみ帰すべきではなく、それは他のどのような因子によって生ずるのであるだろうか。

近代家族の不安定性については、さきに述べた三つの局面からのアプローチ

があるが私は第三の家族関係の不安定性を社会関係より考察して、上述の二つの疑問を解明したいと思う。なお周知のごとく、近代家族は夫婦家族とも呼ばれているほど夫婦中心であるから、私は夫婦関係に重点をおいて説明することとする。

## 2

近代家族における夫婦関係は、あらゆる社会的統制より解放され、ただ友愛感情のみによって支配されているものであろうか。先ずそれが法律から拘束を受けていることは、近代国家の家族法をみればおのずから明らかとなるであろう。それではそれは、モーレスや慣習によって規制されているのか、この点が問題となる。そこで夫婦関係を社会関係としてみるとすれば、それは当然地位(status)と社会的役割(social role, 以下ただ役割とのべる。)よりこれを説明することが必要であろう。社会に所属する人々は、必然にある一定の地位をしめ、その地位にある人々は、この地位と関係のある他の地位にいる他の人々に対して、どのようにふるまうべきかという比較的明確な行動様式をもっている。他人に対するこのような行動様式は、それぞれの地位について規定されており、役割と呼ばれている。例えば、社会における夫や妻の地位にはそれぞれ一定の行動様式があり、これを夫や妻の役割とすることができる。地位は静的なものであり、役割は動的、機能的なもので外部的な行動様式として表わされたものであるから、夫婦関係もこの役割によって具体的に理解することができるであろう。

ニューカムによれば、役割とは、<sup>5)</sup>「ある地位を占める人々に期待される行動様式」と定義され、またリントンの規定するところによれば、<sup>6)</sup>「役割とは、ある特殊な身分に結びついている文化型式の総和」を意味する。あるいはコットレルも、役割を<sup>7)</sup>「社会関係の体系において、あたえられた地位に適した個人の習慣や態度の組織」と説明している。これらの定義から考えられることは、先ず第一に、役割は期待された相互的な行動型相である。すなわち役割は、社会において、社会的期待がその各成員によって学習を通じて獲得されたもので

あって、期待されたこれらの行動様式の種類には、例えば男子にとっては、夫の役割、父の役割、あるいは妻が夫に対して期待している生計維持者としての役割、一方婦人にとっては、妻の役割、母の役割、あるいは夫が妻に対して期待する主婦としての役割などがある。夫婦関係を不安定にする多くの欲求不満は、夫婦の一方あるいは双方が、彼等の期待された役割を完遂することができない時に生ずるのである。

上の定義より第二に考えられることは、役割の内容が文化型の総和、すなわち慣習や態度の組織として形成されていることであって、これを最も明確に表現しているのが、コットレルの文化的役割の概念<sup>8)</sup>である。コットレルによると、役割は二種類に分けられ、一方は個別的役割 (**unique role**)、他方は文化的役割 (**cultural role**) と呼ばれている。個別的役割は、各個人の人格や経験から作り出され、公的には現われない私的な役割である。これに対して文化的役割は、集団期待の組織された型であって、それは社会的に是認され、その伝統的なものはモーレスや慣習の中に統合されている。すなわちある社会の中で良い夫、良い妻の概念によって作られた一連の慣習やモーレスの行動型相である。例えば、夫は一家の経済的安定のために働くこと、子供に対して良い父であること、妻は家庭内において家政を司り、子女を養育し、貞節な妻であることなどが、伝統的な役割にほかならない。結婚した夫婦の相互作用をみると、ある部分の行動は前者の個別的な役割によるが、他の大部分は、この文化的役割に準拠して行なわれる。したがって結婚にさいし、夫婦は、新しい行動型相を創り出そうと考えたり、つとめたりするよりも、むしろ無自覚的に伝統的な役割、つまり文化的役割を演じているから、結婚生活が比較的努力を要せずして円滑に行なわれるのである。

さてこのように夫婦関係は役割によってその行動が拘束されているが、これらの役割、とりわけ文化的役割は上述のように慣習はいうにおよばず、モーレスによって影響をうけているから、近代家族の夫婦の行動の大部分が、これらによって制約されていることとなり、この側面に関するかぎり、結局制度家族

の夫婦関係とそれほど大差がないと考えてよいであろう。したがって近代家族の夫婦関係は、際限のない自由な個性的要素のみによって支配されているとは断定できないのである。

次にいま少しく役割の性質をのべ、夫婦関係が、この役割によっていかにその行動のレベルでの一致 および 統一性をあたえられているかを検討してみよう。

先ず第一に考えられることは、ニューカムによる役割規定 (role prescription) の概念である<sup>9)</sup>。役割は社会関係の体制のなかで、あたえられた地位に適した機能を実行する様式を表わしているが、しかしこのなかには一般には是認されている役割と是認されない役割がある。例えば、妻の役割には家政を司る役割が本質的な部分であり、着飾ることは認可されているがそれに必要な役割ではない。不貞を行なうことは、いかなる妻にも禁止されている。故に妻の役割には妻であるかぎり、すべてのものが必ず行なう役割があり、これをニューカムは役割規定と呼んだのである。したがってこれは、社会より是認されたものであり、夫婦関係においても相互の行動に基準をあたえるものであって、この基準の範囲内の行動をとることが望ましいとされ、夫婦関係はこれによってきわめて単純化されるであろう。夫婦関係の失敗は、この規定された役割を知らないのではなく、この範囲外の禁止された役割を行なうことによる場合もある。

第二の役割の特質は、リントンが例を引いてのべたように、役割は既製品の洋服のようなもので、その選択の範囲は限られていることである<sup>10)</sup>。このように選択の範囲が限られているのは、役割が地位に密接な関係を持つからである。役割にはある程度の個人差はあるが、しかし多くの場合、人々はある特定の地位を占めている相手方に向けて行動するのであり、逆にその相手方は、人々自身に対してその地位に即応した行動を期待するのである。このようにして自分と他人との関係を円滑にすることを期待するに当っては人々は行きあたりばったりの行動をとることはできない。自分の地位に規定された行動型相に主

として従わなければならないのである。夫として、あるいは父としての地位をしめれば、そこには一定の規定された行動型相があり、その地位に全く無関係な役割を選択することはできない。したがって役割は、夫婦関係においても、それに統一性をあたえ行動の選択範囲が縮小されるために、相互の行動を単純化させる性質を有するのである。

第三の特質は、役割は自他の役割について共有的理解を有することである<sup>11)</sup>。ニューカムによれば、どの社会でも規定された役割の綱は、言語のようなものであるとされている<sup>12)</sup>。我々は新しい言語を気ままに発明して、これを使用することができないのと同じように、自分で一連の役割を勝手気ままに発明してこれを取得するということは不可能である。どのような社会の青年男女も夫や妻としての将来の役割を知ろうとして辞書を調べるようなことはしない。新婦は結婚する以前より夫の役割だけでなく妻としての自分の役割についてもよく理解しているからである。一組の夫婦関係が崩壊する場合、それは相互の規定された役割を知らなかっただけではなく、夫婦の一方または双方が相手の応じそうにもない特殊な役割の要求を相手に対してもつからである。このように役割をよく熟知しているということは、自分のなすべき役割をよく理解していることのほかに、相手の補足的役割にもよく精通していることを意味する。実際各人は、他人の役割について補足的に考えることなしには自分の役割について想像さえもすることができないのである。役割に精通するとは、このように相互の役割に精通していることを意味する。何をなすべきであるかということの外に、他人の行為に何を期待すべきかということ各人は知らねばならない。例えば、婦人が妻としての役割をうまくやろうとすれば、それは必然に夫の役割についても、よく精通する必要がある。このように役割は、言語と同じように共有的理解にもとづいているということができる。

さらに相関係している役割の相互依存は、どの地位も権利と義務を有する事実明確に現れている<sup>13)</sup>。すなわち我々は、ある地位をしめる相手に対して義務を負うと同じように、相手もまた自分たちに対して義務を負うのである。例

えば、夫に対する妻の義務は、夫が妻に期待する権利に対応するものであり、その逆も真である。もし各役割が他の役割と何等の関係もなく、また何等の相互統制もないなら、そこには権利もなければ義務もないであろう。そして相互の関係のある役割をとる人々の権利と義務は、そこに相互の共有的理解がなければ対応することが出来ないのである。このように役割の性質そのもののなかに、共有的理解を通じて人々を強固に結合せしめる作用があり、夫婦関係もこれによって統制されるかぎり、そこには統一性と一致が確保されるのである。

第四に、役割は各人のパーソナリティの中の重大な部分をしめている。役割は屢々、個人が独立的判断を発達させる以前に学習され、そしてまた無批判的に受け入れられる。子供は自分自身の家族から夫婦の役割の基本的原理を学ぶ。良い夫、あるいは良い妻の概念は、殆んど自分自身の両親を観察することから獲得するものである。そして両親の家庭で見たこの役割行動は、子供のパーソナリティの中核にしっかり根を下し、パーソナリティの主要な部分を形成する。かくて結婚した夫婦の相互の反応の多くが、すでにそれぞれのパーソナリティの中に作られているのであるから、夫婦が結婚と同時にその役割行動をとる過程において、自分達夫婦のあいだの行動のレベルにおける調整を努力して行なう必要がそれほど大きくはない。

役割は、以上のような性質を持ち、夫婦の行動にたえず基準をあたえ、相互の行動に通路を開き、夫婦間の行動を単純にし、あるいは共有的理解によって相互の結合の度を高める性質をもっている。近代家族の夫婦関係が不安定であるとしても、今日その大多数の夫婦がある程度障害もなく平和な安定した関係をつづけているのは、正にこの役割の作用がその基底に確固として根を下しているからであるといえよう。しかもその役割の中核となるものはモーレスや慣習であり、近代家族の夫婦間の行動の大部分は今もなお、制度家族と同様、この役割を通じて社会的統制を受けているのであるから、全く個人的な情緒、あるいは友愛感情のみに依存しているとは断言できないであろう。

上述のように、近代家族における夫婦関係が全面的に情緒的な友愛感情に依存せず、役割によって社会的拘束をうけていることが明らかとなったとすれば、その不安定性についても、当然情緒的なものだけに帰すべきではなく、役割の次元から生ずる側面をも認めなければならないであろう。では役割の次元に注目した場合、不安定性は、どのような原因によって生じるのであろうか。簡潔に言ってそれは、相互に期待されたそれぞれの役割のあいだに矛盾がある場合に生じるということができる。すなわち夫婦関係においても、相互に期待された役割が補完的であったり、一致している場合には、円滑に進展するが、これに反して、それが相反的であったり一致を欠くときには、そこに相互の欲求不満を生じて夫婦関係は、不安定となるのである。このように相互に期待する役割を補完的にせず、あるいは一致せしめない因子としては、(1)夫婦のそれぞれが成長してきた両親の家族、つまり出生家族 (the Family of Orientation) における父母の果たしていた夫婦の役割の形態の影響とか、あるいは(2)夫婦が結婚以前にそれぞれ生活していた社会的環境の条件、——階級、職業、宗教、人種など——の差異の影響、あるいは(3)社会変動からの役割への影響があげられるであろう。今これらについて順をおって以下に説明することとしよう。

(1) 夫婦が各々の出生家族から伝承する役割の影響。

先ず夫婦の役割は、それぞれが生育した両親の家族の中で基礎づけられている。出生家族の中で子供たちは両親の演ずる夫婦の役割を自然に習得し、それぞれのパーソナリティの中に統合するから、大人になってもこれらは価値的に存続するものである。この出生家族から、夫婦が結婚によって作り出す家族、つまり再生産家族 (the Family of Procreation) へ移植される役割は、権威型を包含することがある。再生産家族で夫婦は屢々自分の両親の権威型を有する役割をとり入れ、同じ仕方でそれを再演する傾向がある。これらの型が夫婦のあいだで類似している時には、夫婦関係の調整への努力はあまり必要とされ



ないか、それが異質的である場合には、双方あるいは一方が調整への努力をしなければ、夫婦関係は不安定となる<sup>14)</sup>。ところで類似している場合は、次の三つのタイプに分けて考えることができる。(a) 夫婦がともに母の支配が強い出生家族の中でそれぞれ生長した場合。(b) 夫婦がともに父の支配の強い出生家族のなかでそれぞれ生長した場合。(c) 夫婦がともに両親の統制の調和のとれていた出生家族のなかでそれぞれ生長した場合。

それはともかくとして、以上のような類似した権威型を役割のなかに持った男女が結婚するとき、その夫婦は類似の型を再演する傾向がある。例えば、(a)のように母が支配的な権力を持っている家族のなかで生長した娘は主として支配的な妻と母の役割をとることを準備され、妻に服従的な夫を期待する。一方夫の側も支配的な妻を期待する家庭環境に生育しているために、そのような妻を求める。この場合において、夫婦相互の期待した役割は、相互補完的であるから夫婦関係の調整は容易であろう。これに反し、出生家族における両親の夫・妻の役割の権威型が異質的な家族から出てきた夫婦は、それぞれ異った権威型を役割の中に包含している故に、これらの条件のもとでは、役割期待の調整は、明らかに困難となる場合が多い。例えば、夫が特に強い封建的支配を有する父の下に成長し、他方妻が強い母権的支配をしている母によって育てられた場合においては、再生産家族において夫は権威的役割を演じ妻に服従を期待しているのに対し、他方妻は支配的な母の役割をとり夫に服従を期待しながら結婚生活に入るために、夫婦の相互の役割期待は相反的となり夫婦関係は明らかに不調整となる。このようなときは、二人のもつ権威型を変化させたり、一方あるいは双方が妥協しないかぎり夫婦関係は葛藤を生じ不安定となる。

## (2) 社会的環境の条件の差異による影響。

社会的環境の条件としては、すでにのべた如く、階級、職業、宗教、人種、教育などをあげることができる。これらの異質性は、文化的差異、すなわち生活様式の差異を生じるから、そこに相互に異なった役割の期待を生じ、夫婦関係を不安定にする。先ず階級において例をとるなら、上流階級の妻の役割は家

事や育児はほとんど召使などに委託し、伝統的な主婦や母の役割よりむしろ社交や娯楽を中心とした夫の遊び仲間としての役割を求められるが、これに反し下層階級の妻は、専ら伝統的役割としての母や主婦の役割とか、あるいは場合によっては賃金取得者としての役割を強制されることもある。したがって夫婦が異種の階級から結婚した場合、相互の期待した役割には矛盾を免れにくく、調整の努力を必要とする。同様に、職業、人種、宗教、教育の差異によって役割が異なる場合については改めて述べる必要がないであろう。

### (3) 社会変動の役割に及ぼす影響。

元来夫婦の役割は年齢、性、社会的地位、結婚によって帰属的に与えられた役割 (ascribed role) に属し、したがって各人の能力によって業績的に獲得された役割 (achieved role) と異なって、個人の自由意志によって変更できない条件にもとずいて発生したものである。この役割が文化の中に強く根を下して固定しているために、この役割をとる人々はそれに強制されて適応しなければならない。

安定した前近代社会において、夫婦のあいだでの役割期待は相互に一致していた。夫が妻に期待した役割と、妻が夫に期待した役割とは相互に補完的であったし、そのみでなく、夫婦は相互に遂行不可能な役割を相手に期待することをほとんどしなかったのである。例えば、この時代には現代のような大量の失業がなかったから、夫は妻の期待通りの生計維持者としての役割を終生果たすことができた。だがこれに反して、現代のような変動のはげしい不安定な社会においては、夫はいかにに生計維持者としての役割を果そうと努力しても、経済社会の種々の要因によって失業を余儀なくされ、この伝統的役割を全く自分の意志に反して完遂することが不可能となる場合がある。

さらに近代社会の科学や技術の急速な発展によって、そこに生活する人々の行動は伝統的役割とたとえず矛盾する。現実の夫婦の行動と伝統的な夫婦の役割とは当然合致しないことが多い。例えば、妻が都市のアパートの小さな家庭を管理する時、自給自足時代の祖母などの行なった伝統的な主婦 (homemak-

er) としての役割を、そのまま遂行することは全く不可能である。とりわけ既婚の職業婦人の場合、その現実の行動と伝統的な主婦としての役割とのあいだに矛盾がきわめて大きいのは当然であろう。元来この伝統的な夫婦の役割は、農耕社会の大家族制度の時代に作られたものが多く、現代の夫婦の行動と矛盾するのは必然的ともいえよう。社会変動の過程において、物質文化は急速の進歩をするのに反し、精神文化、とりわけ制度文化はそれとともに進歩しないから、ここに文化遅滞 (cultural lag) が生じる。夫婦の伝統的役割は丁度この制度文化の範疇に入り、現実の夫婦の行動と合致しない。これを一種の文化遅滞として理解することが許されてよいであろう。このような矛盾は現代の夫婦関係に多くの混乱をあたえ、また心理的にもそれを不安定なものにしているのである。

次に、社会変動は役割の内容や性質に変化をあたえ、それによって夫婦が欲求不満を生じて夫婦関係が不安定なものとなる。このような状態について以下に説明を加えておこう。

#### (a) 役割の選択の困難

カークパトリックがのべるところによると、現代の社会における妻の役割は、多数の役割をかかえこんでいる。妻や母や主婦としての伝統的役割のほか、近代社会における都市家族においては夫と平等の地位を婦人がしめることから作り出された協力者としての役割 (partner role) や、仲間としての役割 (Companion role) がある。あるいは貧困な家庭においては妻に賃金取得者としての役割も加わる。これらの多数の役割のなかのどれを選択するかということに多くの婦人は当惑し、緊張し、また多数の役割を同時に行なうことによってどの役割も完遂することができず、欲求不満におちいることがある<sup>15)</sup>。これに反し、前近代社会における妻の役割は、母や主婦としての伝統的役割に限定され、役割の選択困難の事態も生起せず、またそれから生じる欲求不満も起らなかった。

#### (b) 役割への不満足

近代社会における男女共学によって、妻は夫と平等の教育を受ける結果、夫と平等の才能をもつ者が多くなり、そのような妻は、協力者としての役割や仲間としての役割をとったり、あるいは社会において華々しく活躍している職業婦人の役割を羨みながら、一般的な世論とか夫に強制されて、不満を感じながら心ならずも伝統的役割をとり、そして欲求不満におちいる場合もある<sup>16)</sup>。

### (c) 役割の葛藤

これは夫婦相互のあいだの役割期待が相互に一致していない場合である。例えば、妻が求婚時代の輝かしいロマンチックな仲間としての役割をとることを望んでいる一方、夫は妻に家庭的な静かな主婦としての役割を望んでいる時に葛藤が生じる。さらにロマンチック・ラブはこの仲間としての役割に混乱をあたえる。たとえ夫婦がこの役割をとることに相互に一致したとしても、元来ロマンチック・ラブは求婚時代の愛情であって、相手を理想化する要素を持っているから、少なくとも、もとのままの状態で、結婚後も継続することは不可能であり、これを期待することは明らかに実現性がなく、所謂エリオットとメリルのロマンチック・ラブの誤謬 (romantic fallacy) となって益々夫婦関係を不安定にするのである<sup>17)</sup>。

なおこの役割の葛藤は、役割に対する夫婦の誤解からも生じる。近代都市家族の中で新しく作り出された協力者としての役割には多くの錯綜が生じる。多数の夫婦は、この役割をとることを期待はするが、しかしこの協力者としての役割は特権と義務をその中に包含し、妻にとってのこの特権には、経済的独立家族の財産に関する平等の支配、夫の同輩としての承認、夫に対しての妻の一方的奉仕の免除、住居の所在を決定する平等の権利や社会的道徳的自由に関する平等の諸権利がふくまれる。さらにこの役割の責任は、独立していない子供の場合をのぞいては一般に扶助料の拒否、子供の養育への平等の責任、家族の社会的地位を維持する平等の責任、財産を蓄積する平等の貢献である。これは結局家族内において男子と婦人をあらゆる面で平等化したものである。ところが妻の側では、この役割に対して特権の中にある自由は、大いに期待するが、責

任を果すことはあまり期待しない。夫は妻に特権を許すと同時に責任をとることを妻に期待し、かくしてこの役割に対する夫婦の重大な誤解が生じ葛藤を起すことになり、夫婦関係は不安定となる。元来この仲間としての役割や協力者としての役割は近代の自由平等思想や男女共学、婦人の職業への進出より生じた新しい都市家族の中で最近取得されて来た役割である。しかし現実にはいまだ多くの矛盾を保持し、たとえこの役割を完遂したとしても妻にとっては伝統的役割から全く解放されるとは現在のところ考えられない。

#### (d) 役割の不明確性

年令と性の分析において、コットレルは、現代の夫婦の役割は明らかに不明確であるとのべている<sup>18)</sup>。とりわけ現代の都市家族の妻の役割は明示的に限定されたものではなく、役割を完遂することによる満足感を味えない。農耕時代の妻は多くの家庭内の重労働を強いられて、肉体的には苦痛はあったであろうが、しかし明確に限定された伝統的役割にしたがって行動することができたから、心理的にフラストレーションを生ぜず安定していたであろうし、また少なくともこの時代の妻は自分に何が期待されているかを知って、それを完全に実行することができた。これに比較し現代の都市の妻は役割の不明確性のために多くの精神的不安定を経験しなければならないのである。

### 4

以上のように、近代家族における夫婦の役割には多くの混乱やあるいは内容の変貌が生じ、そのため夫婦関係に緊張をあたえて、それを不安定ならしめている。しかし近代家族の夫婦関係といえども、伝統的役割による部分が多く、もしこの種の役割が欠如しているとすれば、夫婦はその場で即時に多くの役割を作り出して行かねばならず、それは全くはかり知れぬ努力を必要とし、行動をきわめて複雑なものにするであろう。伝統的役割は夫婦関係に統一性と一致および行動の基準をあたえているのであるが、この伝統的役割の内容の中核となるものは、パーゼスの制度家族を統制する要素として指摘したモーレスや慣習であるということが出来る。したがって前近代家族が制度化されていると

同様に、近代家族もある意味で制度化され、ある程度の社会的統制を受けており、そこでの夫婦の行動は社会的な期待と義務に密着しているのである。それ故近代家族は社会的拘束から全く解放されて個人的な情緒のみを基礎としているとは断言できないし、また近代家族が友愛感情に支配されることのみから不安定になったということも全く正しいとはいえないと思われるのである。もちろん近代家族の夫婦関係に作用する主なる因子の一つとしては、情緒的なものをあげなければならず、その影響によって不安定となっている局面も多々あるであろうが、我々は役割より生ずる不安定性、すなわち期待された役割と現実の役割行動とのあいだの矛盾、あるいは役割への夫婦間の期待の不一致、または社会変動による役割への心理的な欲求不満などを看過してはならないのである。換言すれば、このように近代家族の夫婦関係の中に多くの欲求不満や葛藤を生じるのは、役割を通じて強い社会的拘束力が働いているからだともいえよう。

しかしこの役割より生じる不安定性も、結婚生活の年月を経るにつれて、夫婦が相互にあまり無理な期待を寄せ合わず、相互の能力の可能性や現実性をみて理想的なものを期待しなくなり、役割の不一致や相反をできるだけ排除することにつとめるにしたがい、次第に軽減するにいたるであろう。また社会変動による現実の行動と期待された役割とのあいだの矛盾も、徐々にその距離を縮少する傾向にあると思われる。何故ならば、役割の種類に関していえば、社会変動の影響によって次第に現実の行動に調和した役割型相が創り出されるようになり、伝統的役割の外に、現在ではまだ多くの矛盾を包含しているが、都市家族の夫婦の役割のなかに、仲間としての役割や協力者としての役割という新しい役割型相が出現しているのをみれば、近代家族における夫婦関係もやがては安定した状態におかれる時が来るのではないかと考えられるのである。一部の社会学者や社会心理学者<sup>19)</sup>のあいだに近代家族の夫婦関係は、あらゆる社会統制から脱却し、近代思想の個人主義や自由主義の影響のもとにその結合も情緒的な友愛感情によって支配されるようになり、このようにして辛うじて夫婦関係が維持され、やがてこの紐帯も弱化し、ついには、はてしもなく家族は解体

し、やがては社会の基礎的な構成単位としての意味も喪失するだろうという主張が見受けられるが、この説については改めて考察し直す必要があるのではなかろうか。私は以上の結論として近代家族の夫婦関係の統一性は、現在もなお本質的には役割によつて保たれ、その不安定性はむしろ一時的な現象であると考えたいのである。

#### 参 考 文 献

- 1) E. W. Burgess and H. J. Locke: *The Family, from Institution to Companionship*, pp. 26~28
- 2) 姫岡勤編『社会学』pp. 88~89
- 3) E. W. Burgess and H. J. Locke: *op. cit.*, pp. 355~356
- 4) E. W. Burgess: "The Family in a Changing society," *American Journal of Sociology*, Vol. 53, 1948, No. 6, p. 418  
Ruben Hill: "The American Family, Problem or Solution,?" *American Journal of Sociology*, Vol. 53, No. 2, 1948, p. 125
- 5) T. M. Newcomb: *Social Psychology*, p. 280
- 6) Ralph Linton: *The Cultural Background of Personality*, p. 77
- 7) L. S. Cottrell, Jr: "Roles and marital Adjustment," *Publication of the American Sociological Society*, Vol. 27, 1933, p. 107
- 8) L. S. Cottrell, Jr: "The Adjustment of the Individual to His Age and Sex Roles," *American Sociological Review*, Vol. 7, 1942, p. 617
- 9) T. M. Newcomb: *op. cit.*, p. 281
- 10) R. Linton: *op. cit.*, p. 104
- 11) T. M. Newcomb: *op. cit.*, p. 283
- 12) *ibid.*, p. 283
- 13) *ibid.*, p. 284
- 14) A. G. Truxal and F. E. merrill: *Marriage and the Family in American culture*, p. 194
- 15) C. Kirkpatrick: "The Measurement of Ethical Inconsistency in Marriage," *The International Journal of Ethics*, Vol. 46, 1933, pp. 446~447
- 16) *ibid.*, p. 447
- 17) M. A. Elliott and F. E. Merrill: *Social Disorganization*, pp. 366~383
- 18) L. S. Cottrell, Jr.,: "The Adjustment of the Individual to His Age and Sex Roles," *American Sociological Review*, Vol. 7, 1942, p. 618

- 19) 高田保馬著『社会学原理』pp. 1084, 1089  
清水幾太郎著『社会心理学』p. 152